「巨大な連鎖のメタファー」の比喩的観点からの研究
－動物階層を中心に－

高橋正憲*
subaru555wrc@gmail.com

<目次>

1. はじめに
2. 先行研究
3. 調査方法
4. 調査結果
4.1 比喩的命名の調査結果
4.2 動物比喩の調査結果
4.2.1 動物類の調査結果
4.2.2 鳥類の調査結果
4.2.3 魚介類の調査結果
4.2.4 両生類・は虫類の調査結果
4.2.5 昆虫類の調査結果
5. おわりに

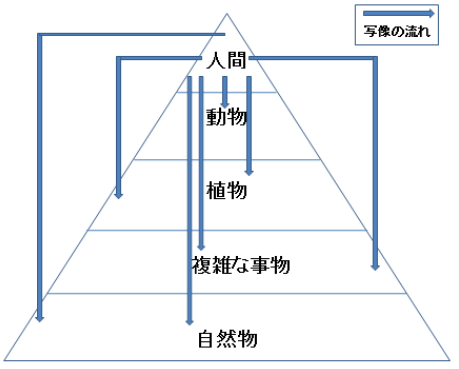
主題語: 比喩(simile)、メタファー(metaphor)、命名(naming)、イメージ(image)、理想化(idealization)

1. はじめに

Lakoff&Turner(1989)は、動物メタファーの概念構造の説明に「存在の巨大な連鎖(Great Chain of Being)」というモデルを導入している。野沢・渋谷(2007)では「存在の巨大な連鎖」とは、「人間・動物・植物・複雑な事物・自然物の順で形成されている階層で、さらに各階層の中にも階層が存在しており[1)]、この階層で上位に位置するものは、下位に位置するものの特性をすべて有しているというものである。さらにこの『存在の巨大な連鎖』の中では、人間が最上位に位置しており、動物や自然物の持つ特性をすべて備えているとしている。我々人間は、下位に位置するものを理解しようとするとき、人間が持っている特性を通して理解している」と解説している。この解説をもとに作ったのが＜図1＞である。

* 新羅大學校 敎養課程大學 助敎授

1) 例えば、動物の階層の中でも、犬は昆虫より上位であるとしている。また、植物の階層では、木は藻より上位に位置しているとしている。



＜図1＞存在の巨大な連鎖

脚注2)で述べている通り、階層の中にさらに細分化された階層があるとしているが、それが具体的にどのような階層なのかはLakoff&Turner(1989)や野沢・渋谷(2007)でも触れられていない。「存在の巨大な連鎖」は一般的にはこのピラミッド型で正しいと思われるが、細分化した場合には文化圏ごとに異なると思われる。例えば、動物の階層には哺乳類、鳥類、魚介類、昆虫類などの階層で分類されるであろうが、どのような基準で上位・下位と分類しているのか。そこで本研究では、日本語における動物階層を中心に分類及び細分化を行うことを目的とする。

2. 先行研究

ここでは、先行研究について触れていきたいと思う。

まず、野沢・渋谷(2007)では、コミュニケーションにおけるメタファー表現と字義的表現の機能の違いを述べている。例えば、「『He is a wolf』というメタファーは『He is dangerous』という抽象的な表現とは異なり、オオカミについての百科事典的知識を喚起し、オオカミの外見上のイメージや価値的評価や情動といった主体的概念も呼び起こす。さらにはメタファー表現によって喚起された百科事典的知識や情動が、抽象的な概念とは異なるコミュニケーション上の効果を持ち、聞き手において特定の心的変化や行動的変化を引き起こしやすいと考えられる」と述べている。つまり「ヒツジはオオカミに対しては無力であり、オオカミに襲われたヒツジが生き延びる方法は、抵抗することではなく、逃避することであ

る。このような知識はwolfと呼ばれる危険な人物に対して、聞き手が無力であり、不用意に抵抗せず、逃げるべきであるということを伝えるであろう」としている。ただし、この解説は、どの文化圏でもそうなのか、あるいはある特定の文化圏だけで起こり得ることなのか、このような点においてやや不明であることが惜しまれる。

次に、籾山(2006)は、「人間以外のものを通して人間を見る、あるいは理解する」というテーマで日本語を分析している。「植物」「鳥」「天気」などのテーマから調査した結果、「人間を植物を通して見る」「人間を鳥を通して見る」といった見方が存在することは、婉曲表現や誇張表現の他に人間をより一層的確に表現したいという気持ちの表れであると結論付けている。しかし、なぜ「鳥」や「植物」といったテーマを選択したのか、また「鳥」ではなく「犬」や「猫」でも人間の営みを表現できるのではといったことへの疑問点が残っていることも付け加えておきたい。

最後に森岡・山口(1985)では、日本語の命名について上位・下位カテゴリーという視点から調査・分析を行っている。日本語の命名には何らかのパターン・法則・規則があり、それを詳しく解説しているが、認知言語学的視点からの分析が行われておらず、やや主観的な分析もあるが、当時としては非常に画期的なものであったと思われる。

3. 調査方法

本研究では、Lakoff&Turner(1989)の「存在の巨大な連鎖」における「日本語の動物階層」の分類及び細分化のために命名と比喩という観点から調査を行った。さらに単なる「動物階層」だけでは漠然としているので、哺乳類、鳥類、魚介類、両生類・は虫類、昆虫類と5つにカテゴリー分けを行った。これは『小学館の図鑑』による分類に従ったものである。

命名の調査方法は、『小学館の図鑑　動物』[2)]『小学館の図鑑　鳥』『小学館の図鑑　魚』『小学館の図鑑　両生類・は虫類』『小学館の図鑑　昆虫』で調査を行い、例えば「ウミネコ」や「クマタカ」という鳥がいるが、これは鳥を他の動物で喩えて命名を行っている。つまり比喩で写像を行い本来ならその鳥固有のオリジナリティーのある命名を行うべきところを安易にすませているとも言える。このような写像で命名を行われている、つまり比喩的命名が多ければ多いほど、その階層における重要性は低くなるとも言えるであろう。さらにこのことか

2) 本研究では「動物」＝「哺乳類」とした。

ら、日本語の動物階層の大まかな上位・下位の位置づけがわかると思われる。

以上のように『小学館の図鑑』を利用し、哺乳類約630種、鳥類約630種、魚介類1100種、両生類・は虫類約500種、昆虫類約1400種から他の動物から比喩的命名が行われているものを抜き出した。

次に比喩による調査方法だが、本研究における比喩とは、隠喩(メタファー)、換喩(メトニミー)、提喩(シネクドキー)の3つの概念を指すものとする。この3つの概念を簡単に説明すると、認知言語学キーワード事典ではメタファーは「2つの事物、概念の間に類似性が成り立つとき、一方の形式で他方を表現すること」としている。メトニミーは「単一の領域内における隣接性に基づく」としている。シネクドキーは「包含関係に基づいて転義が起こるもの」としている。メトニミーとシネクドキーについては、瀬戸(2002)が「メトニミーは『XはYの一部』であり、シネクドキーは『XはYの一種』である」と平易に解説している。例えば「冷蔵庫を開ける」は、正確には「冷蔵庫のドアを開ける」でり、「ドアは冷蔵庫の一部」であるためメトニミーとなる。また「花見に行く」「花」は、桜を意味しており、「桜は花の一種」であるためシネクドキーとなる。

上記のことを踏まえ、『たとえことば辞典』から動物の比喩によって表現されているものを抜き出した。例えば「巣くう」は「(鳥などが巣を作って棲む意から)悪人などが集まって住む、たまりにする」とあり、これはメトニミーであるため、抜き出した。また「鴛鴦」は「(オシドリは雌雄が常にいっしょにいると言われていることから)仲よくいつもつれだっている夫婦」とあり、これはメタファーであるため、抜き出した。このようにしてことわざ・慣用句を含む約4400項目をチェックし、分析を行った。ここから日本語の動物階層の細分化・詳細化が図れると思われる。

4. 調査結果

4.1 比喩的命名の調査結果

まずは比喩的命名の調査から得られた結果を見て行きたい。

＜表1＞比喩的命名による調査結果

横軸(を) 縦軸(で)	哺乳類	鳥類	魚介類	両生類 は虫類	昆虫類	計1
哺乳類	9	11	28	6	15	69
鳥類	0	0	8	4	12	24
魚介類	3	3	0	0	4	10
両生類 は虫類	0	0	6	6	3	15
昆虫類	1	7	5	3	3	9
計2	3	21	47	19	37	

＜表1＞は、比喩的命名に関する調査結果をまとめたものである。

横軸を縦軸で比喩的命名を行っており、例えば最も多く検出されたのが魚介類を哺乳類で比喩的命名を行っていたものであるが、これは28件あり、イタチウオやウミウシ、オオカミウオといったものである。つまり計1の値が大きくなればなるほど比喩的命名のベースとされやすいということを意味しており、逆に計2の値が大きくなればなるほどあるターゲットから比喩的命名を行いやすいとい言えるであろう。このことから哺乳類は他のものから比喩的命名のベースとされやすく、魚介類は他のもの、特に哺乳類をターゲットとして比喩的命名を行っていることがわかる。また比喩生成時によるベース及びターゲットの関係から「計1-計2」の値を日本語の動物階層における位置づけとした場合、上位から哺乳類→鳥類→両生類・は虫類→昆虫類→魚介類となることがわかった。

4.2 動物比喩の調査結果

次に比喩による調査から得られた結果から見て行きたい。[3)]

3)「虎狼」という言葉のように虎と狼で重複しているものは、それぞれにカウントした。

＜表2＞動物比喩に関する調査結果

	哺乳類		鳥類		魚介類		両生類 は虫類		昆虫類	
	種類	個数	種類	個数	種類	個数	種類	個数	種類	個数
1	馬	58	鳥	32	魚	18	蛇	16	虫	25
2	猫	28	鶏	14	泥鰌	6	蛙	9	蟻	6
3	犬	26	烏	14	蛸	6	亀	4	蝿	4
4	牛	22	鶴	11	貝	4	鰐	1	蚊	4
5	虎	22	雀	10	鰯	4			蜻蛉	4
6	鼠	16	鳶	6	鯉	4			蝉	4
7	猿	14	雁	5	海老	4			蝶	3
8	狐	14	鷹	5	鯖	3			蛍	3
9	狸	11	鷺	4	鰻	3			蜂	3
10	狼	10	燕	4	なめくじ	3			虻	2
小計		223		106		59		30		58
合計	25種263個		27種136個		25種78個		4種30個		21種71個	
総計	102種578個									

表2は動物比喩の調査結果を整理し、さらに上位10種までを載せたものである。4)まず、全体的な観点から見てみると、102種578個の動物比喩が検出されたわけだが、この102種578個の動物こそが日本語の動物階層を形成している要素と言えるであろう。なぜなら比喩の機能の一つに「理解しにくいものを身近なもので喩えて理解しやすくする」というものがあるが、日本語では理解しにくい、または表現が難しい人間の行動や行為などを理解するために身近な動物で喩えていると言い換えられるからである。さらに言えば、ラクダやダチョウ、ペンギンといった今回の調査では検出されなかった動物、つまり動物階層を形成していない動物は、本研究からの観点では、動物と言い表せないとも言えるであろう。また検出された種類は両生類・は虫類を除く4項目では、ほぼ似たような値が検出された。また魚介類と昆虫類が種類・個数共に近い値が検出されており、日本語の動物階層の中でも近いところに位置していると言えると思われる。

4) 両生類・は虫類は4種しか検出されなかったため4種のみとなっている。

4.2.1 哺乳類の調査結果

まず哺乳類の調査結果から見て行きたい。

＜表3＞哺乳類の比喩に関する調査結果

順位	種類	個数	例
1	馬	58	馬が合う、馬乗り、ダークホース、羽目を外す、道草を食う
2	猫	28	借りてきた猫のよう、猫舌、猫に小判、猫撫で声、猫の手も借りたい
3	犬	26	犬掻き、犬死に、遠吠え、負け犬、走狗、犬も食わぬ、犬釘
4	牛	22	牛歩、反芻、牛に引かれて善光寺参り、牛飲馬食、牛耳る
4	虎	22	虎の子、虎の巻、虎を野に放つ、竜虎、虎刈り、虎視眈々
6	鼠	16	どぶ鼠色、鼠算、袋の鼠、ただの鼠ではない、窮鼠猫を噛む
7	猿	14	猿芝居、猿知恵、猿真似、猿も木から落ちる、猿臂を伸ばす
7	狐	14	狐色、狐の嫁入り、狐につままれる、尻尾を出す、野狐禅、古狐
9	狸	11	尻尾を掴む、狸寝入り、捕らぬ狸の皮算用、古狸、狸顔
10	狼	10	一匹狼、送り狼、前門の虎、後門の狼、狼藉、遠吠え、豺狼

表3は哺乳類の比喩に関する調査結果を例を入れてまとめたものである。上位10種までを表記した。

表3からわかるとおり、馬が最も多かったが、馬は農耕馬や馬車などの労働馬だけでなく、乗り物としての馬と用途が多く、もちろん食用としても問題ない。また馬を飼育するためには、犬や猫のように放し飼いはできず、柵で囲わなければならない。さらには馬専用の道具、つまり蹄鉄や鞍、馬銜なども必要で非情に手間・労力のかかる動物である。また競馬というレース専用の馬も存在する。馬とは、齋藤(2002)が述べるところの「権力レベルにおいてのみ占有される高価貴重な財物」という側面も持ち合わせている。これは、平安貴族らは財を傾け競馬(当時は馬競べ)に入れ込み、さらには賀茂神社が神事として「駒競べ」を受け継ぎ、鉄砲以前の合戦では馬中心の戦いであり、そこで騎乗できるのは格の高い武将であり、現代の競馬が日本を含めた世界各国の王室・皇室と関係が深いことでわかると思われる。多用途であり、それに関わる語彙が多いことから表3のような結果になったのであろう。

また馬、猫、犬、牛は家畜または愛玩動物として人間の身近におり、鼠や猿といった野生動物とは親密度という点で異なるため、このような順位になったのであろう。ただし、

虎に関しては日本には存在していないにも関わらず多く検出されたのは、知識として古くから大陸から輸入されて来ていたためであろうと思われる。

4.2.2 鳥類の調査結果

次に鳥類の調査結果を見て行きたい。

＜表4＞鳥類の比喩に関する調査結果

順位	種類	個数	例
1	鳥	32	空き巣、一石二鳥、嘴が黄色い、子飼い、羽交い締め、渡り鳥
2	鶏	14	鳥肌、ひよこ、鶏鳴、鶏肋、鶏口となるとも牛後となる勿れ、葉鶏頭
2	烏	14	烏の行水、今泣いた烏がもう笑う、烏合の集、三羽烏、旅烏
4	鶴	11	鶴首、鶴翼、鶴の一声、掃き溜めに鶴、夜鶴
5	雀	10	楽屋雀、雀躍、雀の涙、吉原雀、雀百まで踊り忘れず
6	鳶	6	鳶口、鳶の巣立ちのよう、鳶が鷹を生む、鳶に油揚げをさらわれる
7	雁	5	後の雁が先になる、雁木、雁足、雁擬き、百姓の雁を押さえたよう
7	鷹	5	鷹派、能ある鷹は爪を隠す、夜鷹、尾羽打ち枯らす
8	鷺	4	烏鷺、鷺と烏、にょろ鷺のよう、雪に白鷺
8	燕	4	燕雀いずくんぞ鴻鵠の志を知らんや、燕尾服、燕、飛燕の如き
8	鳩	4	鳩が豆鉄砲を食ったよう、鳩派、鳩胸、鳩目
8	鶯	4	ウグイス嬢、鶯鳴かせたこともある、梅に鶯、春告げ鳥

表4は鳥類の比喩に関する調査結果を例を入れてまとめたものである。上位12種までを表記した。5)

まず、鳥という語彙が最も多く検出されたが、これは、日本語母語話者には鳥類に理想化認知モデルが存在していることを意味していると言えるであろう。本研究での理想化認知モデルとは、背景知識をもとに対象を単純化・理想化することである。例えば鳥類といっても鷲や鷹のような猛禽類、鴨やあひるのように泳ぎがうまい種、ダチョウやペンギンのように飛べない種、雁や白鳥のような渡り鳥、梟のような夜行性のものと多種多様ではあるが、卵を産む、羽がある、嘴があるなどある程度の共通項があることも事実である。その共通項こそが日本語母語話者が考える鳥の理想化認知モデルであり、今回の調査

5) 鷺、燕、鳩、鶯が同数で検出されたため、上位12種までを表記した。

で検出された鳥という項目であろう。

次に鶏と鳥が多く検出されたが、鶏は家畜という面もあるため他の鳥類とはやや異なり、雛ではなくひよこと呼ばれたり、鳥肉といえば鶏の肉、卵焼きといえば鶏の卵を指す程、特別な鳥であることを物語っている。籾山(2006)も述べている通り日本語母語話者の知識としては、鳥の成長過程は「卵→雛(ひよこ)→巣立つ→大空を飛翔」となっており、それを「医者の卵」「くちばしが黄色い奴」「母校を巣立った卒業生」「世界に向けて羽ばたく」といった比喩で人間の成長過程に当てはめ表現している。特に鶏は「ひよっ子の院生」「(幼稚園・保育園などの)ひよこ組」など「雛」では表現できない比喩もあり、一般的な鳥とは一線を画していると言えるであろう。

また籾山(2006)は、なぜ鳥の成長過程で人間の成長過程を比喩して表現するかということに対して「(他の動物の成長過程に比べて)際立った変化を遂げる、つまり姿を大きく変え、人間にはできない大空を飛翔するということで人間の目を引き、人間の憧れの対象となった」としている。卵から雛、そして成鳥へと移り行く姿に赤子から子供、そして成人への過程を喩え、さらには成鳥が羽ばたいて大空を駆け巡るように、活躍したいという願いからこのような比喩が成立したのであろう。

4.2.3 魚介類の調査結果

次に魚介類の調査結果を見て行きたい。

＜表5＞魚介類の比喩に関する調査結果

順位	種類	個数	例
1	魚	18	漁る、魚心あれば水心、雑魚、釣る、目から鱗が落ちる
2	泥鰌	6	泥鰌汁に金鍔、泥鰌の尾に蛇が食い付く、泥鰌髭、泥鰌の地団駄
2	蛸	6	蛸足、蛸壺、蛸入道、蛸配当、茹で蛸、薬罐で茹でた蛸のよう
4	貝	4	螺旋、ぐりはま、板屋貝、貝の口
4	鰯	4	赤鰯、鰯、鰯雲、鰯の喩えに鯨
4	鯉	4	江戸っ子は五月の鯉の吹き流し、鯉口、鯉の滝登り、俎板の鯉
4	海老	4	海老固め、海老腰、海老錠、海老で鯛を釣る
8	鯖	3	鯖鮎、鯖雲、鯖を読む
8	鰻	3	鰻の頭の水を飲むよう、鰻の寝床、鰻登り
10	なめくじ	3	なめくじに塩、なめくじの江戸行き、三竦み

表5は魚介類の比喩に関する調査結果を例を入れてまとめたものである。

鳥類と同様に日本語母語話者には、魚介類には魚及び貝という理想化認知モデルが存在していることがわかった。例えば魚の理想化認知モデルとは、水中に住む、えら呼吸、ひれがある、体がうろこで覆われている、などであろう。ただし実際の魚類は、淡水魚もいれば海水魚もいるし、水温によっても生息域が異なるし、季節によっても異なる。さらには夜行性のもいれば群れをなして暮しているのもいる。色も多様である。このように様々な特徴からある共通項で作られたのが理想化認知モデルであり、それが今回の調査で検出された魚及び貝であろうと思われる。

最後に鳥類と魚類の差を考えてみたい。魚類も鳥類のように卵を産み、大きく成長するが、その過程を人間の成長に喩えることはない。このことは、魚類が水中で生活しているため鳥類に比べ観察しにくいという点が最も大きな障害であろうと思われるがその他にも、親が子のために狩猟をして餌を与えるなどの人間が共感できる行為がない、ほとんどの魚類は食用として食べられてきたため、やはり捕食対象としての見方が強くなっているという点から鳥類と差がついたのではないかと思われる。

4.2.4両生類・は虫類の調査結果

次に両生類・は虫類の調査結果を見て行きたい。

＜表6＞両生類・は虫類の比喩に関する調査結果

順位	種類	個数	例
1	蛇	16	蛇の道は蛇、蛇腹、蛇行、とぐろを巻く、藪蛇、長蛇、蛇足
2	蛙	9	井の中の蛙、蛙の子は蛙、蛙の面に水、蛙股
3	亀	4	甲羅干し、すっぽん、すっぽんが塗り桶登るよう、月とすっぽん
4	鰐	1	鰐足の出尻

表6は両生類・は虫類の比喩に関する調査結果を例を入れてまとめたものである。両性類・は虫類自体の総数が他の種に比べ少ないため、検出されたものも少ない結果となっている。

蛇が最も多く検出されたわけだが、これは中村(2006)が「古代では神として男性的な畏怖の対象であった」と述べているように古代からその存在が確認されてはいるが、時代が経つ

とともに、神的な力は失い、忌嫌われる対象に成り下がっていったためこのような形で検出されたと思われる。その蛇の中でも「懐に蝮を養うが如し」とまむしが1個検出されたが、このことは、まむしが単に蛇という理想化認知モデルで括られない例外的存在であったことがわかる。

4.2.5 昆虫類の調査結果

次に両生類・は虫類の調査結果を見て行きたい。

＜表7＞昆虫類の比喩に関する調査結果

順位	種類	個数	例
1	虫	25	一寸の虫にも五分の魂、毛虫、泣き虫、虫がいい、虫を殺す
2	蟻	6	蟻が餌を運ぶよう、蟻地獄、蟻の穴から堤も崩れる
3	蚊	5	蚊とんぼ、蚊の鳴くような声、蚊の涙、蚊ばり、蚤の小便蚊の涙青
4	蝿	4	蝿、頭の上の蝿を追え、鳥もちで蝿を刺すよう、蝿が灯心を使うよう
4	蜻蛉	4	極楽とんぼ、尻切れ蜻蛉、蜻蛉返り、蜻蛉が尻を冷やすよう
4	蝉	4	蝉時雨、蝉蛻、松の木に蝉がとまったよう、蛻の殻
4	蜂	4	泣きっ面に蜂、蜂の巣を突ついたような騒ぎ、蜂起、虻蜂取らず
8	蛍	3	蛍雪、蛍光灯、蛍火
8	蝶	3	蝶足、蝶番、蝶よ花よ
10	虻	2	虻の頬当て、虻蜂取らず
10	虱	2	虱つぶし、虱の皮を槍で剥ぐ
10	蚤	2	蚤の小便蚊の涙、蚤の夫婦

表7は昆虫類の比喩に関する調査結果を例を入れてまとめたものである。上位12種までを表記した。6)

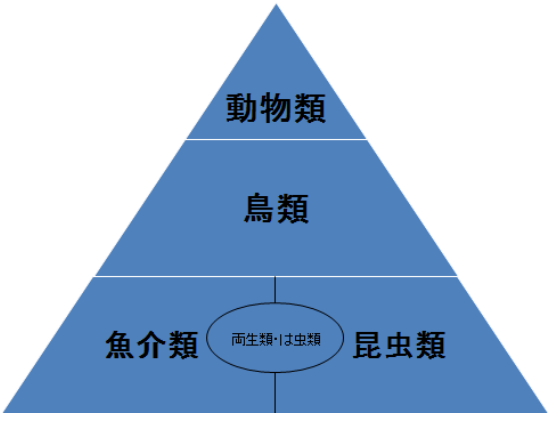
虫が最も多く検出されたが、このことにより鳥類、魚類と同様に日本語母語話者には、虫という理想化認知モデルが存在していることがわかった。今回の調査で検出された虫について『新明解国語辞典』(2000)では、「虫も殺さぬ」や「虫が付く」のように昆虫としての虫をイメージしているもの、「虫がいい」や「虫を殺す」のように体内にあって、人間の心的状

6) 虻、虱、蚤が同数で検出されたため、上位12種までを表記した。

態を左右すると考えられているもの、さらに「泣き虫」や「勉強の虫」のように普通の人とだいぶ違った心的傾向を持っている人の3つに分けられるとしている。この3つの虫が全て同じような理想化認知モデルで表現できるのかということは今回の調査では明らかにできなかったが、2位以下で検出された蟻や蝿といったイメージでないことは言えそうである。

5. おわりに

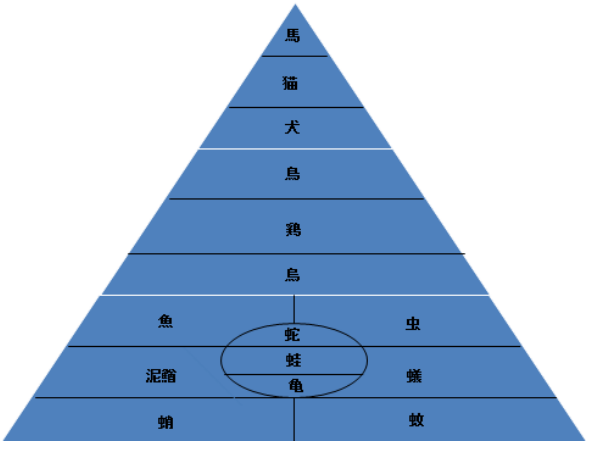
以上のように日本語の「存在の巨大な連鎖」における動物層の細分化・詳細化を試みてきた。その結果、以下の＜図2＞のようなモデルが存在することがわかった。



＜図2＞日本語における動物階層の実体

上記＜図2＞は＜表1＞及び＜表2＞から得られた結果をもとにして作った日本語における動物階層である。上位から哺乳類、鳥類となっており、魚介類と昆虫類は同層に位置していると考えられる。さらに両生類・は虫類は魚介類と昆虫類と同じ層に位置しているが、魚介類・昆虫類に比べ＜表2＞における検出数が少ないこともあり、やや例外的な位置にあると考え、このような位置付けにした。

さらに＜図2＞を詳細化したものが以下の＜図3＞である。



＜図3＞日本語における動物階層の詳細

上記＜図3＞は日本語における動物階層を詳細化したものである。この図からわかることは、鳥類、魚介類、昆虫類にはそれぞれ鳥、魚、虫といったそれぞれのカテゴリーでの理想化認知モデルが入っていることが特徴であり、両生類・は虫類を例外として考えた場合、哺乳類には、哺乳類を理想化したモデルは入っていない。このことは哺乳類を理想化するほど共通項がないということと、下位カテゴリーになればなるほど、生態を単純化させて認知していると言えるのではなかろうか。ただ「獣(けもの)」というある程度、哺乳類を定義できる言葉は存際するが、今回の調査では得られなかった。このことは「獣」の持つイメージと今回の調査で検出された哺乳類と合致していないということを意味すると同時に、虎やライオンといった人間を襲うほどの狂暴な肉食動物が日本に存在していなかった、または狼や山犬、熊のように存在はしていたが、前述の動物のようなイメージは持たれていなかったため「獣」という語彙が検出されなかったのではないだろうか。もちろん本研究は、日本語における比喩的視点から調査・分析したものであるので、民俗学的視点などからの考察とは異なってくるであろう。さらに今回の研究では『たとえことば辞典』を使用したが、広辞苑などの日本語を網羅した大辞典などで調査・分析をした結果を今回の結果に加味すれば、さらに詳細化されたものができあがるであろう。また命名に関しても、語源を探るまでとはいかないにしても、もう少し別の視点からの分析が行えれば、どの部分をどのようにしてい喩えるという比喩的視点からの分析も可能であったかと思われる。また異なる文化圏と比較することにより、今回の調査結果がより深みを増すのではないかということを今後の課題として本研究を終えたい。

【參考文献】

G.레이코프・M.터너(저), 이기우・양병호(역)(1996)『시와 인지』한국문화사
石田戢(2008)『現代日本人の動物観』ビイング・ネット・プレス
井田齋・松浦啓一監修(2003)『小学館の図鑑　魚』小学館
上田恵介監修(2002)『小学館の図鑑　鳥』小学館
可知正孝(2008)『日独の民俗・諺にみる動物比較序論』鳥影社
金田一京介(2000)『新明解国語辞典　第五版』三省堂
齋藤正二(2002)『日本人と動物』八坂書房
佐藤信夫企画・構成(2006)『レトリック事典』大修館書店
瀬戸賢一(2002)『日本語のレトリック』岩波ジュニア新書
小池啓一監修(2002)『小学館の図鑑　昆虫』小学館
高橋秀治(1995)『動植物ことわざ辞典』東京堂出版
辻幸夫編(2002)『認知言語学キーワード事典』研究社
中村明(2011)『たとえことば辞典』東京堂出版
中村禎里(2006)『日本人の動物観　変身譚の歴史』ビイング・ネット・プレス
野澤元・渋谷良方(2007)「コミュニケーションから見たメタファー」『メタファー研究の最前線』楠見孝編, 松井正文指導・執筆(2004)『小学館の図鑑　両性類・はちゅう類』小学館
三浦慎悟指導・執筆(2002)『小学館の図鑑　動物』小学館
籾山洋介(2006)『日本語は人間をどう見ているか』研究社
森岡健二・山口仲美(1985)『命名の言語学』東海大学出版会
Lakoff, G. & Turner, M.(1989)『MORE THAN COOL REASON』The University of Chicago

논문투고일 : 2015년 06월 10일
심사개시일 : 2015년 06월 20일
1차 수정일 : 2015년 07월 08일
2차 수정일 : 2015년 07월 14일
게재확정일 : 2015년 07월 20일

〈要旨〉

『巨大な連鎖のメタファー』の比喩的観点からの研究

－動物階層を中心に－

本研究は、Lakoff&Turner(1989)の「存在の巨大な連鎖」の日本語における動物階層を中心に分類及び細分化を行うことを目的としたものである。命名と比喩という観点から調査を行った結果、まず動物類は、他のものから比喩的命名のベースとされやすく、魚介類は他のもの、特に動物類をターゲットとして比喩的命名を行っていることがわかった。また比喩生成時によるベース及びターゲットの関係から＜表1＞の「計1-計2」の値を日本語の動物階層における位置づけとした場合、上位から動物類→鳥類→両生類・は虫類→昆虫類→魚介類となることがわかった。さらに99種578個の動物比喩が検出されたが、それらの優先順位は、上位から動物類、鳥類となっており、魚介類と昆虫類は同層に位置していると考えられる。さらに両生類・は虫類は魚介類と昆虫類と同じ層に位置しているが、魚介類・昆虫類に比べ＜表2＞における検出数が少ないこともあり、やや例外的な位置にあると考えられることがわかった。さらに詳細に見てみると、鳥類、魚介類、昆虫類にはそれぞれ鳥、魚、虫といったそれぞれのカテゴリーでの理想化認知モデルが入っていることが特徴であり、両生類・は虫類を例外として考えた場合、動物類には、動物類を理想化したモデルは入っていない。このことは動物類を理想化するほど共通項がないということと、下位カテゴリーになればなるほど、生態を単純化させて認知していると言えると思われる。

Research from the metaphorical point of view of the “huge chain of metaphor”

－Around the animal hierarchy－

This study is intended for the purpose of carrying out the classification and subdivided mainly animal hierarchy in Japanese for “giant chain presence” in Lakoff & Turner (1989). As a result of the investigation from the point of view of naming and figurative , first animal class is likely to be the base of the metaphorical naming from others, seafood others, is doing the metaphorical naming in particular the animal such as a target thing is I found. Also if you have a position in the “total1 - total2” value of Japanese animal hierarchy of <Table1> from the base and the target of the relationship by the time metaphor generation, animal class from the upper → birds → amphibians, reptiles → insects → it was found to be a fish and shellfish. Although further detected 99 types 578 pieces of animal metaphor, their priorities, the animal such from the upper, it has become birds, fish and insects is thought to be located in the same layer. Furthermore although amphibians, reptiles are located in the same layer as fish and insects, there may be fewer detection number in as compared to fish - Insects <Table 2>, it is considered to be in a somewhat unusual position thing is I found. If you look at in more detail, birds, fish and shellfish, the insects is characterized that each contains bird, fish, is idealized cognitive model in each category, such as insects, is considered the amphibians, reptiles as exception case was, the animal kind , idealized model of the animal kind are not included. This seems to be true and that there is no common denominator enough to idealize the animal kind, indeed if accustomed to a lower category, as has been recognized by simplifying the ecology.